



昨年の新型インフルエンザ流行は、メディアからの情報の影響力を大いに考えさせられた社会現象でもあった。インフルエンザの流行は凄まじく、対応によっては大変な事態も考えられ、今回の国のインフルエンザ対策はおおむね適正と考えてよかったという考えもある。しかし経過中に新型インフルエンザは弱毒性であることが分かり、それならば安全性をもう少し強調すべきではなかったであろうかという意見もある。そのような観点から見ると国のメディアを通じた情報の内容、発信の仕方にはもう少し工夫があってもいいのではないかと感じられる。

情報とのつきあい方

情報広報部長

あるサイトのアンケート調査の結果では医療関係者の86%が今回のインフルエンザに対する国の対応が不適切であった、一方非医療関係者では52%が適切であったという認識である。このことは同じ情報を受け取っても受け手の立場の違いにより解釈が異なることを意味する。すなわち情報とは受け手がその有用性を決める性格を持っている。

インフルエンザの流行の最盛期には、各メディアは小児科の門前に並ぶ患者を、まるでラーメン屋やスーパーパーの行列のように報道していた。それを見る視聴者は不安を掻き立

山科 賢児

すさ、忘れやすさという特性を垣間見る機会にもなった。最近、流行は下火になり、めつきりインフルエンザに関する報道は減った。人々の関心も少なくなり穏やかな春を迎えられそうである。

情報にはさまざまな特性があるが、メディアからの情報は利的那の言えないだろうか。書籍、論文とは異なり、メディアの情報は次々と書ききされていく。発信される情報の賞味期限は短く、連続性もなく一貫性も曖昧である。そもそもメディアからの情報の性格上それを期待すること自体無理なのかもしれ

てられ、遅れてはなるまいと殺到するという悪循環を繰り返していた。まるでオイルショック、バブルの狂乱のようであった。このように情報はわれわれの行動に良くも悪くも影響を与えるのである。

香港のホテルの宿泊客が新型インフルエンザのため一週間缶詰めになった時期に、たまたま滞在していた。香港のメディアは事件をトップで伝えていたが決してパニック的なような扱いではなく、街を歩いても、地下鉄に乗ってもマスク姿は日本人観光客に多く、宿泊客が拘束されていたホテル前を通つたがそれほど人目立つわけでもなかった。所変われば情報の扱い方、反応も変わるものなのである。

今回の流行は世間にインフルエンザの脅威を知らしめるいい機会になったと解釈できなくもないが、日本人の情報に対する流れやすさ、信じやすさ、忘れやすさという特性を垣間見る機会にもなった。最近、流行は下火になり、めつきりインフルエンザに関する報道は減った。人々の関心も少なくなり穏やかな春を迎えられそうである。

また受け手が情報に無意識的にフィルターをかけて解釈することもある。先入観に基づいて都合のいい情報だけを集めて、自分の先入観を補強するという心理現象である。見たものを聞いて、聞きたいことを聞いて、言い換えれば、見たくないものは見ないし、聞きたくないことは聞かないのである。結局情報の送り手、受け手のお互いが情報にバイアスをかけていることになる。

それならば情報とつきあうにはどうすれば良いのだろうか。情報を鵜呑みにせず思い込まないこと、重要と思われる情報があまり役にたたない一方、一見無意味な情報も重要であるという意識が必要でなからうか。そして自らの五感を駆使して自ら考えること、そして発言し行動することである。現代のインターネット社会では膨大な情報をもとに自分の力で考え抜き、情報を使いこなし、自分なりの意見を構築する能力を鍛える以外に情報とつきあう道はない。